

熊薬同窓会会報

第 48 号

平成19年6月30日
発行

薬学部よ、いつまでも

熊薬同窓会・副会長
飛野 幸子（昭和48年卒）



この号が皆様方のお手元に届く頃は、初夏の日差しがまぶしい頃だと思いますが、原稿を書いている今の季節は、桜の花もすっかり散り終わり、楠若葉がその若草色を春の青空いっぱいに広げている清々しい季節です。楠若葉といいますが、熊本城を思い浮かべる人が多いと思います。そう言えば、今年は熊本城築城400周年記念で、大がかりな改築がなされ、その雄姿が再現されようとしています。熊本城は加藤清正が築城したもので、武者返しや長堀など、実用性と美的要素を兼ね備えた堅牢にして豪華なお城です。また、加藤清正は、土木・治水事業に力を注ぎ、熊本の農業発展の基礎を築いた人物として広く庶民に語り継がれています。私も子供の頃から“せいしょこさん”の話を祖母から聞かされました。近くを流れる小川は、せいしょこさんが造ってくれたもので、そのおかげで、お米がよく出来るようになったと繰り返し聞かされました。400年経った今も、熊本県民にとって清正公への思いは深いものがあることだと思います。

ところで、私にとっての楠若葉は、何と言っても薬学部の大きな楠です。先日も出勤の途中に車を止めてその大木を眺めてきました。薬学部に入學したとき、キャンパスが緑に囲まれていることがとても印象的でしたが、中でも正面の大きな楠は、熊本大学薬学部が歴史を重ねてきた学舎であることの証です。

明治18年に熊本市紺屋今町に私立熊本薬学校として開校され、明

治43年3月に現在地に移転し、翌4月には私立九州薬学専門学校と改称されています。大正14年には文部省直轄学校の熊本薬学専門学校となり、昭和24年に熊本大学に包括され、熊本大学薬学専門学校となり、昭和28年3月には熊本大学薬学部としての第1回卒業生を出しています。その後も、実験棟や図書室、附属植物園などの改築や増設が繰り返され、現在の姿になっています。ハード面のみならず、ソフト面も改革が進められ、修士課程の設置、講座の増設、医学薬学研究科としての博士課程の設置、そして昨年4月には薬学6年制の第1期生が入学してきました。このような変化をあの楠の大樹はじっと見つめてきたのだと思うと感慨深いものがあります。

一方、将来に目を向けてみますと、社会の変化は加速度的であり、大学の存続そのものが危ぶまれているところもあります。そのような中で、薬学部は全国的に増設されており、昨年までに47校が新設され、続々と薬剤師を輩出することになります。それぞれの大学が特徴を出して、薬剤師・薬学研究者を育てようとしています。熊本大学薬学部も様々な工夫を凝らして、社会に役立つ研究者、薬剤師を育成しようとしています。これは現在働いている私達にとっては頼もしく、喜ばしい事でもあります。しかし、社会のニーズを見極め、薬学研究者あるいは薬剤師としてしっかりと社会に根を下ろし、その使命を全うする事が前提となります。老婆心ですが、薬学部は出たけれどもと言うことが無いように、未来永劫に薬学部が存続することを長いスパンで考えてみる事も必要なのでは無いでしょうか。

あの熊本城と同じように400年あるいはそれ以上の歴史が刻まれ、熊本大学薬学部が、卒業生のみならず、地域社会の人々に語り継がれることを同窓生の一人として心から願っています。

目次

薬学部よ、いつまでも	1
退職にあたって	2
熊薬ミュージアム紹介②	4
支部だより	5
関東支部（東京バッチン会）	
大分支部	
宮崎支部	
卒業生だより	7
熊薬研究助成金受領者研究報告書	7
熊薬記念樹だより	9
研究室だより	10
サークル紹介	11
卒後教育講座	11

学内だより	12
“Learn Do Teach”, NIH 留学記(2)	13
博士号取得者	14
平成18年度学長表彰者の紹介	14
庶務報告	15
計報	17
進学・就職先一覧	17
同窓会寄付者芳名録	17
1-10千人会会員一覧	18
1-10千人会寄付者芳名録	22
平成19年度熊本大学薬学部同窓会総会 および懇親会のご案内	24